

畜産・音響操作・社会貢献活動 — 地域に根ざした暮らし方

黒毛和種繁殖農家「要ファーム」代表 要 秀人



沖永良部島：鹿児島島の南546km、奄美群島南部に位置し、和泊町と知名町の2町からなる。面積93.65km²、周囲55.8km、人口12,230人(令和2年12月1日現在)。温暖な気候を活かして、ジャガイモ、サトウキビの栽培や切花栽培が主産業。

島で農業を始めたい

私が生まれ育ったのは兵庫県尼崎市です。現在は、沖永良部島で牛とたわむれながら汗を流す日々を送っています。移住前は大阪にある印刷会社に勤めていました。私が島への移住・就農を決断したきっかけは、二〇一一年の東日本大震災です。テレビから流れる悲惨な光景を目にし、文明の脆さに愕然とした私は、次第に「これから人としてどう生きていくか、本当の幸せとは何か」と自問するようになりまし。当時思い浮かべていたのは、高校生の時に初めて訪れて以来、いつかはここに住みたい、と考えていた沖永良部島への移住です。

同じ頃、大阪のスーパーで買い物しながら、ふと陳列される野菜はどのように育てられたのか、という疑問を抱

きました。農業が遠い存在である都会のスーパーに、さまざまな食料品が途切れることなく並ぶことは、よく考える特別な状態です。それにも関わらず、生産者に対する感謝の気持ちが希薄になっている私たち(都市生活者)が、大量の食料廃棄を生んでいるのかもしれない……。私は、農業に関する本を読み漁り、そして沖永良部島で農家になるうと決心しました。

その後、この考えに共感してくれた妻・笑子(当時彼女)とともに移住・就農に向けた情報収集を始めたところ、すぐに大きな壁にぶつかりました。沖永良部島は「農業の島」と呼ばれるほど農業が盛んで、空いている畑がありません。しかも先祖代々受け継がれてきた大事な畑を、農業経験のない移住者に貸してくれる人など見つかりません。皆さんが口を揃えるのは、「まずは島の人に認知してもらい、信

用を積み重ねれば、畑を貸してくれる人が現れるかもしれない」ということでした。

そこで、私たちが考えたのが「ウエディングマラソン」です。沖永良部島では毎年三月に「花の島沖えらぶジョギング大会」という、島内外から二〇〇〇人以上が参加する一大イベントがあります。私たちは、この大会でウエディングドレスとタキシードを着てハーフマラソンを走り、そのまま役場に婚姻届を提出しました。この反響は大きく、島のケーブルテレビ「ERABUサンサンテレビ」で一年間も繰り返し放送されたことで、私たち夫婦は、移住前にも関わらず、地元の方々に名前を知っていただけました。

二〇一五年一月に、念願の移住が実現。妻はリモートワークが可能なグラフィックデザイナーの仕事をしており、いざというときはその収入に頼れるという安心感から、私は農業アルバイトで経験を積むことに専念しました。加えて、島の方々から信用される存在となれるよう、集落や町の活動に積極的に参加するように心がけました。今では、知り合いの輪も広がり、集落の役員まで任せていただいております。私は、沖永良部島の方々には、よそ者を受け入れる心の広さが備わっているように感じています。

多くの方々の協力のもと畜産業をスタート

移住後しばらくして、島の知人から「畜産をやっている父が入院するので、代わりに牛の世話をしてほしい」とい

う相談をいただきました。その農家は、黒毛和種の母牛に産ませた仔牛を八カ月ほど肥育して競りに出す「黒毛和種繁殖農家」です。当初私は、畜産は莫大な初期費用がかかるので就農の選択肢として考えていませんでしたが、これも良い経験だ、と引き受けました。

しかし、何の経験もない私にとってはすべて手探り状態。とにかく人様の牛を死なせてはいけないと、必死に畜産を勉強しました。生き物が相手なので休みがとれないなど大変な面もありますが、可愛い牛たちに囲まれて働けることは、動物好きの

私にとって最高の環境でした。

これは天職かもしれない、と思いはじめていた矢先、タイミングよく母牛を九頭購入しないかという話をいただきました。このチャンス逃してはいけないと、私は畜産農家になる決意を固め



未利用資材のキラゲの石突きと腐菌床を発酵させた飼料を食べる肥育牛。

ました。

母牛の購入費用として日本政策金融公庫から「青年等就農資金」を借り入れ、五年間の運営費として農水省の「青年就農給付金（現 農業次世代人材投資資金）」を申請しました。牛舎や機械なども借りることができたため、初期費用を比較的安く抑えることができました。しかし当時、知名町で農業未経験者が新規就農した前例はなく、ハードルは高かったと思います。無事に就農できたのは、多くの方々のご協力のおかげです。

現在、母牛は一五頭まで増え、畜産だけでも何とかやっていけるほどに収入も安定してきました。普段はデザイン業をしている妻も、私が忙しい時や、二カ月に一度の競り市での仕事を手伝ってくれるため、無理なく働くことができます。

今後は、より良い仔牛の生産を目指すとともに、沖永良部島にある未利用資材を有効活用した餌づくり（キラケの石突きと廃菌床を発酵させた飼料）や、その餌を使った経産牛（仔牛を生み終えた母牛）の再肥育、太陽光発電や雨水を活用したオフグリッド牛舎の建設など、環境負荷の少ない畜産経営に向けて取り組んでいきたいと思っています。

農業と地域の活性化に取り組む任意組織を発足

畜産の仕事にある程度慣れてきた頃、以前から関心の高かった社会貢献活動を始めました。私がとくに問題意識を

持つて取り組んでいるのは、日本の農家戸数の減少、食糧自給率の低下、世界トップレベルの食料廃棄量の改善です。農業の島・沖永良部島から農業のカッコ良さや魅力を発信し、子どもたちにとって憧れの職業にすることが必要だと考え、賛同してくれた農家仲間とともに任意団体「エラブネクストファーマーズ」を立ち上げました。定期的に行なう会議では、世代や肩書きを気にせず建設的な議論ができるよう「否定的な意見はいわない」というルールを設けています。この結果、メンバーからは、多くのアイデアが出され、さまざまな企画が生まれています。

例えば、若い世代の男性農家には魅力的な人が多いのに、未婚の人が少なくないのは何故だろうという疑問から生まれた企画「恋の収穫祭（yesか？農家？）」があげられます。これは、男性農家の結婚率が低い要因は、おそらく毎日畑と家の往復で出会いが少ないからではないか。ならば農家に特化した婚活イベントを実施することで、直接的に農家人口を増やそうと考えたものです。当初は、島内には知り合いが多く気まずいこともあるから、なかなか人が集まらないのではと不安でしたが、タイトルとコンセプトが面白いと反響を呼び、募集開始後すぐに男女一五名ずつの定員に達し、結果、三組のマッチングに成功しました。

このほか、「実習生おもてなしバーベキュー」は、島内には約七〇名もの外国人技能実習生がいるのに、あまり街中で見かけないという一言から生まれた企画です。調べて



盛大に開催された「祝・春節テト交流会 in 沖永良部島」の様子。

みると、事業所が異なると実習生同士の交流も少なく、ましてや事業所以外の日本人と接する機会はほとんどない現状でした。そこで、日頃から島の農業を支えてくれている感謝とお互いの国の勉強も兼ねて、おもてなしの場をつくりました。これを機に日本を好きになってもらい、将来的に継続して国内で就労してほしいとの希望もあります。

二〇一九年二月に開催した第一回目は、実習生九名（ベトナム人八名、中国人一名）と地元住民一五名が参加、後日、在日ベトナム大使から感謝状もいただきました。昨年一月には、鹿児島県との共催で「祝・春節テト交流会 in 沖永良部島」を開催、実習生三四名（ベトナム人三三名、中国人一名）と地元関係者約五〇名が参加する盛大な会となりました。

二〇二〇年は、さまざまなイベントが中止になりました。そこで、子どもたちの思い出づくりのため、三密を気にせず島の歴史を遊びながら学ぶことができる「世之主スタンプラリー」を実施しました。世之主は、約六〇〇年前に沖永良部島を統治していた島主のことで、多くの伝承が残されています。このラリーは、世之主とその妻、彼らに仕えた四天王が現代に甦り、それぞれ縁の場所（ゆかり）でクリアするとスタンプを押してもらえるとというアドベンチャーゲームです。たとえコロナ禍であっても、場所を分散して密を避けるなど、工夫次第で安心してイベントが開催できることを証明できたのではないかと考えています。これらの活動は基本的にボランティアであり、ほとんど収入には結びついていません。しかし、社会に貢献することが自分たちの幸福にもつながると考え、無理なく楽しみながら取り組みを継続していこうと思います。



「世之主スタンプラリー」に登場した世之主と四天王たち。

島は仕事の宝庫

私は、畜産と団体活動に加えて、音響や照明オペレーターの仕事も行なっています。もともと私は、ロックバンドで活動しており、家でのレコーディングなどが趣味でしたが、それを聞きつけた「システムラボ」という島内企業から依頼をいただきました。同社は、PC関係のサービスを中心に、音響・照明のセッティングからオペレーション、最近ではドローンを使った農業散布など多岐にわたる事業を展開しています。私が担当するのは、このうち音響・照明のオペレーションで、島内で開かれる各種イベントや結婚披露宴、町が運営する文化ホール「あしびの郷・ちな」の機材操作や設備管理などを行なっています。平均して月



照明のオペレーションをする筆者。

に二〜三件ほどの仕事をいただいております。現在では音響事業の大部分を任せていただけるまでに技術も向上しました。

このほか、趣味の作曲を

活かして、町民ミュージカルの劇中歌やローカルテレビ番組の主題歌などの曲づくりの依頼も受けています。これらは趣味の域を出ない些細なスキルですが、人口の限られた島の中では重宝され、収入につながることもあります。これも島ぐらしの魅力の一つです。

また、私自身は就業しませんでした。これまでに役場・観光協会・介護職員などさまざまな仕事のお誘いをいただきました。田舎には仕事がない、とよく耳にしますが、単に一般的なイメージを引きずっているだけだと思います。人口に占める生産年齢の割合は、都会よりも島の方が低く、沖永良部島でも多くの職種で人材不足が発生し、知り合い伝いに働き手を探している事業者が多々あります。これから移住を希望している方の働き口については、より好みさえしなければ、基本的に心配は無用だと感じています。むしろ仕事を引き受けすぎて疲弊してしまわないように、自分のスキルと島のニーズを判断して、取捨選択することが必要だと思えます。仕事とコミュニティ活動のバランスが重要です。

島は、コミュニティのつながりが強いいため、知り合いの紹介などで人材を探すことが多く、ハローワークや求人広告での募集が少ないケースもあるかもしれません。ネット検索などで仕事が見つからない場合でも、あきらめずに実際に島へ足を運んだり、島の知人などにたずねてみることをお勧めします。

私に限らず、島の方々は当たり前のように複業をしています。例えば、沖永良部島で大人気の「ケイビング」のガイドの皆さんのほとんどは、別の仕事を掛け持ちしています。ただ、その多くが、ダイビングショップや宿泊業・飲食業など、ケイビング客と関連のある観光業に就いており、彼らは複業という感覚を持ってはいないのかもしれませんが、また、会社勤めでも、休みの日には農業や漁業をしている方が大勢います。島はサーブिसに限りがある分、生きる上で必要なさまざまなことを自分で行なってしまうため、その延長としての複業が日常的になっています。

島で実現した幸せな生活

以上のように、私が複数の仕事や活動を並行的に無理なくできている理由は、都会と島の社会システムの違いにあるのではないかと考えています。都会では、生きるために必要なものをお金で買う。お金さえ稼げれば、積極的に社会集団に所属しなくても生きていける社会です。しかし、生活と仕事が分断され、ストレスが多く、孤独感や将来への不安で精神的に疲弊しやすい社会だとも思います。

あくまで個人的な感覚ですが、島の社会は、人と人とのつながりが強く、何があっても助け合いながら生きていくという安心感があります。この安心感は、一緒に汗をかいて働き、集落の活動に参加し、お酒を酌み交わすなどの日々の信頼の積み重ねでしか手に入られません。島社会

は、人と人とのつながりで回る、お金に換算できないシステムで動いていると感じます。生活と仕事の境界があいまいで、人とのつきあいが好きな方にとってはストレスなく生きていける社会。私には、この島のシステムが合っており、これからもここで生きていきたいと思っています。

コロナ禍をきっかけに多くの企業でテレワークが進められ、ワーケーションや多拠点生活で島を選ぶ方も増えたように感じます。なかには、単に海に囲まれた空間で働きたいという理由だけで、島に目を向けた人もいるかとは思いますが、そういう方々にもぜひ集落や団体の活動に参加してほしいと考えています。本当の島の良さを実感できるのは、コミュニティや人々の温かさ、島人が代々守ってきた文化に触れた時だと思うからです。沖永良部島で私が見つけた幸せな生き方・働き方を、ぜひ体感しにいらしてください。



要 秀人 (かなめひと)

昭和57年、兵庫県尼崎市生まれ。平成27年に鹿児島県沖永良部島へ移住。黒毛和種繁殖農家「要ファーム」のほか、任意団体「エラブネクストファームズ」代表も務める。